

# カミュ『異邦人』における「無関心」

鈴木 忠 士

## 第V章 自然的世界

### 3 躁 と 鬱

#### 4 父親イメージと母親イメージ

A. 父親イメージ……（この項の途中まで前号，途中まで本号）

B. 母親イメージ

#### V-4-A. 父親イメージ

##### (1) ムルソオの父（つづき）

さてムルソオだが、彼の場合には、『ムルソオの母』の項で詳述するように、エディプス期以前の母と子の双対関係にあって常態を超える極端な愛と憎しみの拮抗があり、後者が前者を圧倒することもしばしばであったのではないかと推測されるのである。そこで初めて、フロイトの言うような、激しすぎる「母親に対するアンビヴァレンツを解消しよう」として、そのなかの「すべての反抗的感情」を父親（代理者）に向け替える必要がでてくるのである。何故ならば、母親（代理者）は、「小児に愛することを教える」最初の人である、即ち「そのこまやかな情愛によって子供の性欲動を目ざませ、この欲動のうちに強烈なものになるための準備を」するだけでなく、「欲動がそれに向かってひとを駆り立てるあらゆることを成就できるような人間になる」ように、「心的生活全般に対し、倫理的および心的な働きのすべてに対して」<sup>66)</sup>関与する能力を養い育てる最初の人であるからである。言い換えれば、母親は小児にとって彼が「愛すること」を学ぶ「最初の〈愛〉の対象」<sup>67)</sup>なのであり、如上の意味での「愛すること」とは生きることの核心を

成すものなのだから、小児はなんとしても母親を「〈愛〉の対象」として保持し続けなければならないからである。

小児の「反抗的感情」が父親に向け替えられるためには、先ず小児にとって父親がそうした感情に値するものとして見えてこなければならないだろう。そこで、小児が母親について抱く統合的な内的イメージの成立をあるいはその維持を不可能にする程に凄まじい憎悪の対象たる母親の否定的な側面が、肯定的なそれから隔離され、父親の上に転移されるのである。父親は陰湿な執拗さを備えた残酷な迫害者として、あるいは憐愍と軽蔑を誘う柔弱な卑劣漢として立ち現われてくる。小児の「反抗的感情」はこうして動機付けを与えられ、正当化されることになる。

だが、このような〈父=悪い母〉への「反抗」は、一方では〈父〉を排除し、他方では〈慈母=良い母〉の幻想を強化することになるから、息子は自縄自縛に陥って、「遷延した母子共生」<sup>68)</sup>から脱け出せないことになってしまう。

必ずしもそうした結果にならないのは、先述のように、このような場合の男の子でも、他方ではやはり父親（代理者）に「特別な関心」を抱き「理想」を求め、これを範として分離独立を果たそうとする欲求が盛んになってくるからである。従って父親が、息子の投げ掛けた〈悪い母〉のイメージを撥ね除けうるほどに、強さと情愛深さを兼ね備えた人物であるならば、つまり残酷と厳格、心弱い優しさと慈愛との相違を身を以て示しうる人であるならば、息子は同一対象の上で統合的な父親イメージを獲得し、それを楯とも導きの糸ともして母親拘束の圏外への活路を拓いていくことができるであろう。

この息子の分離独立の指標であり範である父も、常態においては、殊更に「反抗的な感情」を転じられることも、〈悪い母〉のイメージを投影されたりすることもないので、言わば〈まずまずの父親〉(Good-enough-Father)であってよいのであるが、ムルソオに窺われるように、母親拘束下に取り籠めら

れる虞が多分にある場合には、父親は典型的な〈慈父 = 慈父〉でなければならない、即ち文字通り「理想」の体現者でなければならないのである。そして、なお厄介なことには、息子が何にもまして渴いている情愛とは、母に求めて得られなかったものなのだから、〈慈父〉の慈愛には、その反面の〈敵父〉にそぐわないような母性的な情愛深さを潜在させていることが、即ち〈父 = 良い母〉であることが無意識裡に願望されることになるのである。そのような原理的に相反すると見える両面を具備した「理想」を体現することは不可能であるか、可能であるとしても極めて稀なことに違いない。そこで、息子の父親を見る眼は弥が上にも敵しいものになるのだが、幼いムルソオが現実に出会った父親代理者は幾分の残酷さと気弱な優しさを備え、母親(代理者)に多少とも軽じられている節の見える、「理想」に照らされてそれらが欠点として際立ってくるような人でおそらくはあった。母に聞かされた「話」が幼い息子の脳裏に印象深く刻み込まれたというのも、そこに表象される父親像と現に今まで目にしてきた父親代理者のそれとの間に符合するところが少なからず認められたからなのであろう。

それは確かに、一面においては、投げ掛けられた〈悪い母〉のイメージに相応な〈父〉の実像なのだが、しかし又、「反抗」によく堪えうるかどうか懸念されるのである。そこで「反抗」の鋒先は鈍り、軽蔑や憐愍に席を譲ることになる。従って、この〈父〉は同一化の対象としては食い足りず、早くも幼い息子のうちにこんな〈父〉になりたくないという「否定的な形」<sup>69)</sup>での父親同一化の傾向が培われることであろう。この否定的な父親同一化は〈父〉そのものの否定に至ることもありうるが、又逆に息子に手ずから「理想」の〈父〉を想像裡に形成させる縁<sup>よすが</sup>ともなりうる。手控えられた「反抗」は無論「母親に対するアンピヴァレンツ」を「解消」し切れず、母親拘束の圏外への脱出は中途半端なままに終わっているわけだから、分離独立を目差す息子にとって〈父〉の「理想」化は必須のそして必死の階段なのである。

エディプス期に入っても、一方でムルソオは、母が自分を「確かに愛してくれていると信じ」切ることができない。他方で、「恐ろしい物語」の父親像を修正しうるような他の逸話を何も子供にもたらさない母は、亡き父を愛していたとも敬意を払っていたとも思われない。そればかりか、母の「話」の父親像は現実の父親代理者のそれに裏打ちされて、恐怖と軽蔑と同情の入り混った「少し嫌悪を覚え」させる、残酷で愚かしく気弱な父のイメージが幼いムルソオの脳裏に増々深く刻み込まれる。これでは、母を「最初の〈愛〉の対象」として「愛すること」を学びそれを介して母以外の異性の「〈愛〉の対象」に向かう「準備」をすることもできないし、做いつつ凌ぐべき対象という意味でのライバルとしての父を持つこともできないので、男の子の分離独立を促すことにその重要な機能があるエディプスの三角形は形造られない。そこで、前エディプス期以来の〈慈母 = 良い母〉と〈嚴父 = 慈父〉の幻想が強化され、二重の意味で幻想的な「三角形化 (triangulation)」あるいは「エディプス化 (œdipification)」という「命の板 (planche de salut)」<sup>70)</sup>に縋ることになる。だが、〈慈母 = 良い母〉は「ほぼ良い母」の知っている自然な子離れの面を持たないので、今や近親相姦的な色合いを帯びてきた母親拘束下に息子をなお一層惹き留めることになるし、〈嚴父 = 慈父〉は、前エディプス期と同様、母性的な慈愛を潜在させていることが期待されているので、原理的に矛盾する二つの要素のアマルガムとなるのである。

〈嚴父 = 慈父〉の幻想は、次々と立ち現われてくる父親代理者の上に投げ掛けられてゆくのだが、子供が現実に見出すことのできる「理想」の体現者は、大抵の場合、それが分解してその両極の各々が極端な現われ方をしたものの、即ち強い一方の〈嚴父〉か優しい一方の〈慈父〉である。前者には理性・論理・意志・力・果敢・対立・厳格といった〈父〉の属性の一切が備わっていると思われさせるのだが、母性的な情愛深さへの期待を潜在的に宿す眼には、こうした〈父〉の強さは残酷さの彩りを帯びて見えてくる。後者には感情・直観・柔順・融和・保護・優しさといった〈良い母〉の諸属性が備

わっていると思われぬのだが、分裂した半面の父性的な強さへの憧憬を潜めた眼には、情における強さによって前者に対抗するものと見えてくるとはいえ、範として仰ぐには物足りないものである。

この対照的な、「理想」の、従ってまみえることの難い二つの父親像の間に、幼いムルソオが最初に出会ったと推測されるような父親代理者が、そして殆どの父親代理者達が位置するわけである。彼等はいずれも始めは〈厳父 = 慈父〉の幻想を多かれ少なかれ投げ掛けられ、息子の敬愛と服従を受けるのだが、次いで、この幻想を裏切って息子の反抗を買い、非力で腰弱で、幾分残酷で愚かしい父であることを暴露し、「嫌悪」と憐愍と軽侮の対象に早晚転落していくのである。こうして「父親探し (quête du père)」<sup>71)</sup>は永続的に繰り返されていく。つまり「エディプス化」が遷延するわけである。

とは言え、「理想」の父が現実の世界に求められ続ける限りは、息子は母親拘束を回避していくことができる。〈慈母〉幻想は母親以外の異性の対象に転移されて、それは〈厳父 = 慈父〉の幻想と異なってそれ自体のうちに矛盾を孕まず現実の対象の一面でありうるから、それ以外の面に目を塞いでいる限り、幻想と対象は重なり合って、幻想の実現を暫しの間でも信ずることができる。又そのようにして異性の対象の許で母性的な慰撫への飢えが充たされている限りは、そしてその程度に応じて、〈厳父 = 慈父〉にお門違いの母性的な情愛を期待するという無意識的な願望も弱まって父性的な色合いを強めた庇護への欲求となり、「理想」は現実世界に足場を得易くなる。親和世界の他の住人達には見受けられないムルソオの一面、論理・首尾一貫性・強固な意志への志向は、彼がそうした過程を経て継起的にあるいは断続的に「理想」を体現する父親代理者達に巡り逢うことができ、又ある程度それらとの同一化に成功したことを窺わせるに足るものである。

だが、もし、〈慈母〉幻想が現実との齟齬によって破綻し文字通り幻滅したならば、そしてこの幻想が効を奏している限り遠のけられ、あるいは封じ込められえていた〈悪い母〉が息を吹きかえして侵出し、席捲するとすれ

ば、「確かに愛してくれている」という幻想を抑圧されていた愛されてい  
ないという原初の確信が圧倒し去るならば、息子は直ちに前エディプス期の愛  
憎<sup>せめ</sup>闘<sup>め</sup>ぎ合う双対関係に引きずり込まれてしまう。というのも、「三角形化」  
は、〈慈母〉幻想を補強するような異性の対象が現<sup>うつ</sup>に得られている限りにお  
いて成功するのであり、又その限りにおいて「父親探し」も可能となるので  
あるとも言えるからである。

エディプス期以前の反対感情併存的な双対関係は、「ほぼ良い母親」とい  
う現実の同一対象の上で分離していた正負のイメージが統合されることによ  
って乗り超えられるわけであるが、負価を帯びたイメージが他方を圧するよ  
うな場合にはそれも不可能になる。そこで、統合以前の<sup>こと</sup>として、〈良い  
母〉のイメージを守ることが先決になる。〈良い母〉は、例えば自然界に投  
影されて〈自然 = 良い母〉として守られうる。しかし〈悪い母〉が勝ちを制  
したような場合、例えば抑鬱気分に取り籠められてしまったようなときには  
共感能力が衰微してそれすらも不可能になる。残る方途は唯一とつ、〈慈母〉  
幻想の目差すところは母子一体化にありそれが又ムルソオのような共生的人  
間の命でもあるのだから、〈悪い母〉の呪縛に逆うことを止めて呑み込まれ  
るままに委せる形で母子一体化を成就することだけである。「理想」の〈父〉  
も最早求められることはない。「三角形化」の企図は放棄されるわけである。

してみれば、死刑判決が下った後の独房の中でムルソオが、「少し」とい  
う限定が付されているとはいえやはり「嫌悪を覚」えさせた父の原初的イ  
メージを「思い出した」というのは理に適っていると言える。というのも、  
既述のように、母子一体の幻想の破綻によって彼が陥った抑鬱気分はこの独  
房内で一つの極みに達するのであり、それと相関的な無意識的な死への願望  
も又そうであるからである。

「今では、それが分った。それはごく自然なことなのだ」とムルソオが言  
うとき、母子の双対関係の傍らに臚に垣間見られ、次いでエディプス期にお  
いて全容が確認され、以降退け続けてきた負価を帯びた父親イメージをここ

に至って彼は改めて見直し、受容し、遅蒔きながらも同一化の範として立てようと試みているのである、と先ずは解しうる。しかしそれに続く一節は、彼が亡父の生前の振舞いを〈くまずまの父親〉の「自然な」それとして「分った〔包摂した〕」(comprenais)というのではなく、負価を帯びたままで振り入れ、負の方向で父を凌ごうとすらしていることを示している。彼の「嫌悪」は、先に指摘したように、父が「処刑を見に行った」ことに対するものとも、「そこ〔処刑場〕へ行くと思っただけで身体の具合が悪くなった」り「吐きつづけた」りしたことに向けられていたとも解しうるのであるが、今や彼は口中に蘇る「嫌悪」の苦味に痺れつつ、一方では、「話」の「父」の振舞いに窺われる潜在的なサディズムを継承して、それを弱気な「父」以上に徹底させて、「すべての死刑執行を見に行こう」と考え「毒々しい歓喜」を覚えるのである。そのようにして彼自らが、「羨望と恐怖をとまなう模範」としての「暴力的な父」<sup>72)</sup>に成り上ろうとしているかのようである。しかし他方では又、「すべての死刑執行」のその都度「見にきたあとで吐いたりすること」を望んでもいる、つまり極端に「積極的な意味において、父親を再現」し「模倣」<sup>73)</sup>しようと、同情と軽蔑を覚えさせる劣弱な〈父〉に自ら成り下ろうとしているかのようでもあるのだ。こうした志向は潜在的なマゾヒズムの表われと解しうる。というのも、「不安」の強い子供時代の彼がこの「話」を繰り返す耳にしたとき、特定されていない受刑者と自分を無意識裡に同一視するのは避け難いことであつたらうが、その無意識的空想を追体験している今は、「自由の身である僕」が「見に来た」のは、空想においても現実においても、処刑される筈の当の「僕」でしかありえないからである。だから、「毒々しい歓喜」とはマゾヒストのそれでもありうるのである。前者のサディズム的傾向よりこのマゾヒズム的傾向の方が、ムルソオの場合には、その性格のより深い淵に源を発しているように思われる。「こういう仮定に身をまかせ」た後で「おそろしい寒気を覚え」るに至るといふのも、「理性的」な「僕」が自己の心中に潜む盲目的なマゾヒズム的衝動の存在に

気付いたからに他ならないのである。そうしてみれば「暴力的な父」というサディズム的幻想は、この潜在的なマゾヒズム的幻想のより顕在的な補完物であると言える。大体「暴力的な父」はムルソオの父親同一化の「模範」には決してなりえない筈なのである。彼にとっての「模範」には〈慈父〉としての半面が要求されていたからである。それに、「暴力的な父」自体、一般的に「模範」としての機能を果たしうるのであろうか。「すべての死刑執行」とは、サディズム的幻想の行きつくところ、「すべて」の「人間〔男〕」達の「死刑執行」なのであるが、それを「見に行」く、つまり象徴的にあらゆる「死刑」の「執行」者となる「暴力的な父」とは何か。「死刑執行」が去勢を象徴的に表わすとして、「すべて」の「男」達を去勢する父とは何か。拙論の見方からすると、〈父〉とは「男」に母親拘束という被去勢状態からの脱出路を示す者の謂であるから、「暴力的な父」は根本的には〈父〉の名に値しないとと言える。従って、ムルソオが「暴力的な父」と劣弱な父というヤーマス的な父親像を幻想してこれに一体化しようとするとき、真の意味で「模範」となりうる〈父〉を排除しているとしなければならない。生涯の終りに当って彼が初めて見せた、父親と和解し同一化を試みようとする気構えは結局上辺のことに止まるのであって、最後の「エディプス化」の企てと見えたものは、母子の呪縛的な双対関係に再び陥落していく現実を隠蔽するものにすぎないのである。

だから、母の「話」は一種の隠蔽記憶として機能しているのである。自らのマゾヒズム的幻想の補完物にすぎない「暴力的な父」を仇とも相方ともして息子は自らの死への願望を実現させるのだが、この死への願望は、既述のように、元々は母親との関係に根差すものなのだから、本当は、「暴力的な父」を「傀儡 (pantin)」（29）として母親が息子を殺すのだと言わなければならないのである。そして、恰も「暴力的な父」に殺されるかのように振舞う息子は、そのようにして最後まで「母親に対するアンビヴァレンツ」を「父親の下」で「解消」しようと努めるのであり、母親の否定的側面から目を背



けようとするのであると言える。「暴力的な父」がそうした〈悪い母〉の「傀儡」でしかないことは、「殺人で告発されながら、母親の葬式で泣かなかった廉で処刑される」のだと分っていながら、結局「運命」(170)の名の下に死を受容するに至るところに良く窺われるであろう。「運命」とはマゾヒストにとって形を変えた「両親代理者」であり<sup>74)</sup>、ムルソオにとっては母親の究極の「代理者」なのである。

結局、母がムルソオに語った「話」には、水準を異にする二つの解釈を施すことが可能である。第一にテキストの「意図的 (volontariste)」な水準では、この「話」はエディプス・コンプレクスの「古典的な図式」の枠内に収まる父親の原イメージを息子のムルソオに植え付けたとすることができる<sup>75)</sup>。この観点からすると、彼がそれ以降に出会う父親代理者達は、去勢者、去勢者/被去勢者、被去勢者の三群に別たれることになるであろう。第二にテキストのより深層の、作者自身にとっても無意識的な水準では、この「話」のうちに前エディプス期の母と子の双対関係にまで遡りうる祖型的な父親イメージを発掘することが可能なのであって、そこからしてエディプス期の父親像も再構成されなければならない。それは、息子の分離独立を促す面と〈悪い母〉の傀儡として息子を母親拘束に蹴落す面との、正負の両面を持つ両義的存在としての〈父〉である。この観点からすると、ムルソオが後に出会う父親代理者達は、以下の四群に別たれることになるであろう。〈厳父 = 悪い母〉、〈慈父 = 良い母〉、始めは厳父乃至慈父と見えながら後にそうでないことを暴露して息子の期待を裏切る父、始めから劣弱で少なくとも息子には情愛薄く嫌悪や憐愍や軽蔑を受ける父。それぞれに該当する登場人物は、第一群は検事、第二群はセレスト、第三群は社長・養老院長・門番・予審判事・弁護士・裁判長・刑務所付司祭、第四群はサラマノ、ペレである。

作者が作品に与えた「意図的な」構図も作品の言わば上部構造であるから、作品の全体的理解を志す拙論の立場からすると、これも無視することはできない。そこで以下の父親代理者達の分析に当たっては、ひとまず、先に述

べたエディプス・コンプレクスの「古典的な図式」に拠る三つのカテゴリーを採用し、これに息子代理者を付加して、四つの項目を立てることにする。ただ、実際には、前エディプス期をも視野に収めるような観点から解釈が施されることになる。例えば、「肢体不自由者」、「醜く年取った哀れな人々」、「人々が不安気に眺めるような醜い容貌」をした人、そして「人々が嘲りながら描く戯画」的になる人々は、前者の観点に立つと、直ちに「被去勢者」<sup>76)</sup>の印象を与えるものとされるのであるが、拙論の観点からすると、憐愍と嫌悪と軽蔑の対象としての父親の原イメージを喚起するものとされるのである。

〈被去勢者〉とはペレ、サラmano、〈去勢者 = 被去勢者〉とは社長、門番、養老院長、弁護士、予審判事、公判の判事達と陪審員達、刑務所付司祭であり、〈去勢者〉とは検事である。そして、息子代理者とはセレストとレエモンである。先に挙げたその他の息子代理者達については、項目として特に立てないが、機会のあり次第論及することになる。以下、この順序で順次検討していく。

(2) ペレ——パンゴーの察する通り、ペレ (Pérez) とは「父」(père) のことであろう。ペレはムルソオの母の「許婚」と呼ばれて「二人」して「嬉し」<sup>(23)</sup> がっていたと言われ、ムルソオの「母を特に知っていた」<sup>(129)</sup> と主張する。「知る」(connaître) は性的な意味合いでのそれを含意しうる。従って、エディプスの「古典的な図式」に当て嵌めると、ペレは正しく息子ムルソオの「ライバル」としての父の位置に収まると言えることになる。だが、このライバルは「軽くびっこをひく」<sup>(26)</sup>、つまり「その去勢に疑問の余地を残さないようにびっこをひいている」<sup>77)</sup> ののである。

「去勢」の印は「びっこ」とは限るまい。語り手 = 主人公ムルソオは初対面のペレについて次のような肖像画を物している。「ズボンが靴の上でコルクの栓抜きのようによじれている服を着、ワイシャツの大きな白襟に比べて小さすぎる黒布のネクタイをしていた。唇は面砲<sup>にきび</sup>がいくつもできた鼻の下で

慄<sup>おそ</sup>えていた。細いきれいな白髪の間からつきだしている、無格好にたるんだ奇妙<sup>くわう</sup>な耳の、血のような赤色が、蒼<sup>そう</sup>白<sup>はく</sup>な顔との対比で、僕を驚かせた。」(25)  
 (傍点は鈴木、以下同じ) これが一幅の「戯画」でなくてなんであろう。その服装からしても、真白にドーランを塗って朱で隈取ったピエロの顔を想わせるようなその外貌からしてもそうである。「無格好にたるんだ奇妙な耳」はサラマノの飼犬の「スパニエル犬 (l'épagneul)」(42)のそれを連想させる。そう言えば、ペレの耳が「赤色」(rouge)とすれば、サラマノの犬も「湿疹<sup>しつしん</sup> (le rouge)」(42)に罹っているのだ。更に、「スパニエル犬の耳」と言えば、「たるんだ乳房」のことなのである<sup>78)</sup>。とすると、ペレは単に去勢された父と言うよりは、女性化しさえしている父として捉えられていることになる。ここで、サラマノとその飼犬の関係と、ムルソオとその母のそれとの間に対応関係を認めることができたことが想起される。そこでは、「スパニエル犬」は同時に母と息子それぞれの分身と看做すことができた。つまり、それは母と子の愛憎相半ばする両価的な双対関係を象徴する存在なのである。とすれば、ペレの女性化とは母化なのであり、彼は父の座から母親拘束下に墮ちた元父であると考えることができるのではなかろうか。

ペレの姿格好は「子供っぽい」(23)印象を与えるし、その振舞いも少なくとも養老院長の目にはそのように映っている。彼がムルソオの母と一緒に「許婚」同士の役を演じて、それは「ふり〔戯れ〕をした (avait joué)」(171)だけのことに、「子供っぽい」遊戯に興じただけのことにすぎないのである。しかも、「彼とお母様はほとんどいつも一緒でした」のであり、「許婚」扱いされて「二人とも嬉しかった」(23)、つまり、この擬似的な母子関係には「憎悪をこめて睨みあう」(43)というような反対感情の併存はなかったかのようなのである。こうして、ペレは去勢の印によって女としての母の獲得を競うライバルの位置から滑り落ちたとしても、息子と母の寵児の座を奪い合う「子供」のライバルとして立ち現われてきたのである。

このペレとムルソオの母との関係についてはムルソオは鞆<sup>たもと</sup>敷<sup>しき</sup>に置かれて

いたのであって、エディプスの「古典的な図式」に立って見ると、息子が母親を父親に間男されるという珍妙な事態なのだが、エディプス期以前の母子双対関係を視座を移すと、子供に返った父親が、息子が他所で遊んでいる間に母親の膝を横取りしてしまったといったところであろう。この横着な母盗人を帰って来た放蕩息子はどうやって蹴落すのであろうか。〈父〉の位置に、劣弱で滑稽な父に戻すことによってである。即ち、ペレは「こわれた操り人形 (un pantin disloqué)」(29) と、「手足の利かない」(disloqué) 操られるままの「身振りの滑稽な人」(pantin) と呼ばれ、「戯画」としての無力な父に突き戻されるのである。この「関節の外された」(disloqué) 父は法廷では「廷丁が証言台まで、彼を支えて行かねばならなかった」(129) し、検事にはムルソオが「泣く」のは「見なかった」と、弁護士には「泣かなかった」のは「見なかった」(130) と答えて、法廷という〈父〉を象徴する世界で、「操」られるがままの「人形」として落伍した父の役を演じて「傍聴人〔観客〕(le public)」(130) の失笑を買うのである。

けれどもこの「こわれた操り人形」は、ムルソオ「には葬式の日に一度会っただけだ」と、「あれは僕にはひどい大きな苦痛でしたから。失神さえしてしまったくらいだから」(129-130) と述べて、ムルソオの「薄情」(93) を際立たせ、一矢報いるのである。それはペレの〈慈父〉としての一面を示すものだろうか。しかし彼は息子としてのムルソオを「見ることはできませんでした。」(130) だから彼は父であると言うよりは、暗に「薄情」を非難されているムルソオからすれば、〈良い母〉を亡くした〈良い子〉の役を演じ切っている「子供」なのである。

以上の如き文脈から見れば、処刑の朝を控えたムルソオの、「彼女〔ムルソオの母〕がなぜ生涯の終りで『許婚』をつくったか、なぜ人生をくりかえすふりをしたのかわかったような気がした」(171) という述懐を、遂に母を〈父〉に託して分離独立に踏み切ろうと決意したエディプスの言葉と解することはできなくなる。何故なら、「許婚」のペレは〈父=子供〉であって、

エディプスの範とすべき〈父〉はどこにも居ないからである。それどころか、〈良い母〉を〈父 = 子供〉に盗られたムルソオを待つ者は、「憎悪の叫びで迎えてくれる」(172) 〈悪い母〉の他にはない筈なのである。

(3) サラマノ——「彼の顔には赤味をおびたかさぶたがあり、毛は黄色くてまばらだった。」(42-43) このサラマノの肖像に打たれている「赤」という印は何か。「赤」という色は「権威のほぼ普遍的な象徴」であって、『異邦人』においても、例えば検事の法服の「赤」(121) がそうであるように、「赤は勝れて〈父〉の色」<sup>79)</sup>である。だが他方では、ガサンがカミュの伝記的事実と照合しつつその全作品に亘って調べたところによると、カミュにおいては「赤」は連想によって血、傷口、女性性器を順次喚起していくという「強迫的な観念複合体」(obsession)を形成している<sup>80)</sup>。ただ『異邦人』に限って言えば、「赤」がこのいずれの象徴作用も担っていないと思われる事例が二つある。一つは、「場末町の青年達」の「赤いネクタイ」(35)であり、いま一つはマリーの「美しい赤白の縞の服」(53)である。前者については説明を要すまい。後者についても、「赤」が特に女性性器を連想させているとは思えない。結局、「赤」がなんらかの表徴としての機能を持つかどうかは、この色を帯びている者に、そして文脈によるということだ。例えば、〈父〉の機能を担っていると目される人物に「赤」の印が打たれている場合、先の赤色の両義性を考慮すれば、それは「権威」を振り翳す者かあるいはその支配を受ける者かのいずれかの、精神分析的に言えば去勢者としての父か被去勢者としての父かの、印となる。いずれか決めるのが文脈だが、先のベレの場合で言えば、「血のような赤色」という表現が端的にそれに当たる。それは負価を帯びた「赤」である。サラマノの場合には、上に挙げた正に「醜く年を取った哀れな人」の肖像が負価を帯びた文脈を形成している。彼は従って被去勢者としての父なのである。

サラマノがムルソオに対して〈父〉の位置にあるというのは、彼の飼犬が亡くした「彼の妻」(68-69)の代理であり、又ムルソオ自身とその母の分身で

もあることによる。サラマノは「飼主 (patron)」つまり父 (pater) なのであり、しかも「憎悪をこめて」、「叩いてののしる」が故に「恐怖心」(43)を抱かれる「暴力的な父」なのである。でありながら去勢されている父なのだ。サラマノが形成する変則的なエディプスの三角形は、前項に述べたペレの形成するその丁度陰画に当たると言える。

エディプス的な解釈の文脈を離れてみると、先ず見えてくるのは、滑稽な「操り人形」としての、憐愍や嫌悪や嘲笑的となる劣弱な父の姿である。「兵士の軽演劇に、出演した」(68) ことのあるサラマノは、飼犬を相手に、「八年来」、「日に二回ずつ」、「恐怖心」と「憎悪」がテーマの同じ出し物を大道で上演し続けてきたのだ。観客のある者は「ひどいなあ」(43, 44)と言ひ、又ある者は「笑った。」(55) 法廷では彼の証言に「ほとんど誰も耳を傾けなかった。」(134)

サラマノは又ペレとは違って、ムルソオの父親代理者として振舞おうと試みてもいる。ムルソオ「が母親を養老院に入れたことで、この界限の者によく思われていない (on m'avait mal jugé) のは知っているが」(94) ムルソオ「のことも、母を非常に愛しているのも知っている」とサラマノが言ったとき、彼はムルソオに対して庇護的な〈慈父〉の役を怖ず怖ず買って出ようとしたわけである。これにムルソオは「今でもどうしてかわからない」程の勢いで言い返す。自分には「ママを看護させるに充分な金がない」し、母は「ひとりぼっちで退屈していた」(70) のだと。これは既に指摘したように、養老院で〈厳父 = 慈父〉の役割を務めている院長の言葉の受け売りである。毒には毒をもって制したわけである。というのも、院長がムルソオの「説明」を「<sup>きまぐ</sup>遮って」<sup>きまぐ</sup>「弁明〔正当化〕 (vous justifier)」(11) してやったと思ひ込んだときと同様に、サラマノが庇うつもりでムルソオ「の魂について語って」しまったとき彼はムルソオ「をゼロにし、ある意味で」これ「に取って代わ」(147) ろうとしたわけである。それは〈息子〉の「私」(146) を封じることであり、拙論に謂う去勢である。ムルソオの「知らなかった」(70) ところ

で「不当な判決」(mal-jugé)を下していた人々の振舞いを本質的に変らぬ、この劣弱な〈父〉のおこがましい温情主義(paternalisme)は〈息子〉の逆鱗に触れて反発を招いたわけなのである。サラマノがどうしてムルソオ「のことも、母を非常に愛しているのも知っている」わけであろう。この夜「知り合ってから始めて」握手をした間柄にすぎないムルソオ「のこと」を彼が「知っている」とすれば、彼の「八年来はなれたことのない犬」(42)を「大変愛していた」(69)というムルソオの母から聞いたのであろうし、その母が「いつも黙って」ムルソオ「のすることを眼で追うだけであった」(12)とすれば、母は専らムルソオ「のことをこぼしていた」(126)筈なのであり、サラマノも又心中ではムルソオのことを「不利に裁いていた」(avait mal jugé)一人であるに違いないのである。

サラマノが去り際「そっと(d'un geste furtif)手をさしだし」たときムルソオは「彼の皮膚の鱗を感じた」と言う。「鱗」(écailles)は「女性の性器」を含意しうる<sup>81)</sup>。そして、サラマノは飼犬を「ほんの仔犬」のときから「ミルクで育て」(69)たと言う。だから、ムルソオがサラマノの温情的な〈慈父〉の「振舞い」(geste)に「どうしてかわからない」で反発するというのも、その蔭に、〈父〉性を「そっと〔密かに〕」侵蝕する〈悪い母〉の気配を無意識裡に感じとっているからなのである。サラマノが「あれは性質が悪く」て「ときどき口喧嘩をしました」(69)と言うとき、そしてそれにも拘らず「今夜犬がほえなければいいが。そのたびに私のだと思っんです」(70)と言うとき、ムルソオはそこに「脱走」(59)した「仔犬」を恨む、つまり養老院に自分を置き去りにして逃げ去った息子を難ずる〈悪い母〉の怨嗟の声を無意識裡に聞き取っているのである。

更に、サラマノも又ペレと同様に、結局のところ〈父=子供〉である。ムルソオの母の分身としての機能を持つ「スバニエル犬」と「八年来はなれたこと」もなく「それと一緒に、互いに外界と交渉を断って、狭い部屋のなかで暮しているうちに、サラマノ老人〔息子ムルソオの分身〕は犬に似てしま

った」(42)のである。サラマノ(子供)は「犬」(母)と「同じ種族」(43)に、母親拘束下に捕えられて母化し、母の半身になり果ててしまった〈父〉なのである。ベレの場合と異なるのはただ、この場合には、〈よい母〉と〈よい子〉の関係ではなく、その陰画としての、「互いに憎みあっていた」(43)〈悪い母〉と〈悪い子〉の関係が暗示されているということだけである。

(4) 社長——一方では、「若い」(63) ムルソオにバリ転勤を勧め、捗の行かない返事に「野心をもたない」のは「事業をする上で致命的なことだ」(64)と苦言を呈するが、他方では、葬式を済ませてきたムルソオに「疲れは大丈夫かとたずね、ママの<sup>とし</sup>齢もきいてくれた」(40)というように、「社長(patron)」(9)は、家族主義的な経営者(paternaliste)である。ただ、この〈敵父 = 慈父〉は、苦言を一蹴されたばかりか〈息子〉に「人間生活を変えることは決してない、どんな場合にも、すべての生活は優劣のないものだ」(64)と逆に論されてしまうし、ムルソオが葬式のための休暇を願い出たときに示した最初の反応は「不満そうな様子」(10)であったのであって、その温情は上辺のものであり、「むしろ彼〔社長〕こそ僕におくやみを述べるべきだ」(10)というように情理を弁えているのは〈息子〉の方なのである。

更に、ムルソオは「僕も彼に不満をあたえたくなかった」(64)とか、「社長の気持も理解できないわけではない」(31)というように、社長の「機嫌」(10, 31, 40, 64)の好し悪しに実に細かく気を遣っているのであって、それはむずかる子をあやす母を想わせる態度である。〈父〉と〈息子〉という両者の関係もその深層においては、社長は〈母〉に対する〈父 = 子供〉なのであり、二重の意味で役割転倒があると言ってよいであろう。

(5) 門番——彼は他の「在院者たち」に対して、「ある範囲内では、彼らに権力を持っていた」、つまり〈父〉の位地にある。だが、彼は不謹慎な軽口を叩いて「彼の妻」に「おだまり」と窘められ「赤くなって、謝った。」(16) 彼も又結局は「歯のない口」(19)をした「在院者のひとり」であることからしても、この「赤」は被去勢者の印であろう。そして「いや、いや、



決して」(16)と助け舟を出したのは〈息子〉のムルソオの方なのである。

夜の霊安室で「ママの友人たち」(18)が「みな僕のまむかいに、門番をかこんで坐り、うなずいているのに気付いた。彼らがそこにいるのは、僕を裁くためだという、滑稽な印象を、僕は一瞬持った」(19)とムルソオが言うとき、彼の眼に門番は、先ず、「裁く」者の長、〈父〉の位地にある者として映っている。そして「門番をかこんで坐」っている男の在院者達は皆去勢する者の表徴としての「杖を持っていた。」(18)だがそれも「一瞬」の「印象」にすぎず、結局は「滑稽」な「戯画」でしかない。それというのも、門番も含めて「眼を見られない」(18)し「歯のない口」(19)をしている在院者達は既に去勢された者達だからである。更に、「うなずいている」(*dodeliner de la tête*)とか、「ぎこちなく首をふっていた。それが挨拶なのかそれとも筋肉のけいれん (*un tic*) なのか、僕にはわからなかった」(19)という表現が良く表わしているように、門番も他の男の在院者達も全て「奇妙な舌打ちに似た音をもらす」(20)だけの、機械的で「滑稽な」所作を繰り返す「自動人形」(67)あるいは「操り人形」に成り下がる。つまり彼達は「滑稽」(*ridicule*)で「奇妙な」(*bizarre*) 嗤うべき劣弱な〈父〉にすぎないことを暴露するのである。

この些細な「権力」を銜う矮小な〈父〉も、勝れて〈父〉が支配する法廷では、検事側に立つその証言によって「裁く」〈父〉に賛し、「息子」(129)のムルソオに「初めて、自分が罪人であることを理解」させて一矢報いるのだが、それも束の間、「一緒に煙草を吸わなかった」と弁護士に突っ込まれると、「むろん私が悪かったのです」(128)と認めて、裁かれる〈息子〉の位置に並んでしまう。ここで門番を、「証人は正しい」と断言してその窮地から救うのは又もムルソオなのであり、〈父 = 子供〉は〈息子〉を「一種の感謝をこめて」(129)見るのである。役割転倒があると言ってよいであろう。

(6) 養老院長——「院長 (*le Directeur*)」(11)とは「導く者」(*directeur*)の謂である。彼は「レジオン・ドヌール勲章 (*la Légion d'honneur*) の略綬を

つけて」(11) いる。略綬 (ruban rouge) の色は赤 (rouge) であり、この場合は勝れて「權威」の象徴であり、「〈父〉の色」である。彼は「名誉」(honneur) に包まれ、「威厳」(27) を備えて、「神経をたてやす」(12) く「子供っぽい」在院者達に一方では「許可」と「禁止」、他方では「人情」(23) を以て臨み「お世話」(12) をするという、「模範的な」(47) までの〈厳父 = 慈父〉である。

ムルソオにも「君〔私の愛しい子供〕(mon cher enfant)」と呼び掛け、ムルソオも又「院長様 (monsieur le Directeur)」(11) と応えている。院長は喪主としてのムルソオの了解を得ないで、「宗教に則ってお葬式」を「私が責任をもってそうとりはからっておきました」と事後的に「お知らせ」(13) するのだが、それは院長が〈父〉として事に当たっていることをよく証するものだ。又「あなたみたいに若いと、一緒にいてお母様は退屈なさったでしょう」と理解ある〈慈父〉の態度を示して、ムルソオも従順な〈息子〉として「そのとおりだった」(12) とこれを肯うのである。

だが、院長もこうした完璧な〈厳父 = 慈父〉のイメージを〈息子〉の前で保ち続けることができない。「裁判長〔統率者〕(le président)」(123) というより強力な〈父〉の前では、「家族のことをこぼすのは、いくぶん在院者達の病癖のようなものだ」と始めはムルソオを庇うような素振りを見せながら、重ねてムルソオをその母が「非難していたか」と問われると「そうだと答え」て「今度は、なにも付け加えなかった」(126-127) ののである。しかし、かくあることは既に〈息子〉によって見抜かれていたのではないか。葬式の際に「威厳たっぷりに歩いて、何ひとつ無駄な動作をしなかった」(27) というのも、その「威厳」を信じない者の眼には滑稽な「自動人形」の機械的な「動作」と映った筈である。してみれば、略綬の赤は、被去勢者の印でもあったのだ。

(7) 弁護士——「かなり若い男」(92) で、ムルソオ「に成り代っ (se substituer)」(147) て「私」(146) とする弁護士は、父親代理者というよりはむしろ

ろ・ムルソオの代理者 (substitut) であり、息子の範疇に入れるべきであるようにも思われよう。けれども、被告ムルソオに対しては、「弁護〔防禦〕側 (la défense)」(130) の立役者として、即ち先ずは庇護的な父親代理者としてやはり彼も登場してきているのである。

彼は「すべて健康な人間は、自分の愛する者の死を多少とも希ったはずだ」などと「公判でも、予審判事のところで、言わないと約束させた」(94) が、ムルソオは確かにこれを守った。公判では「こっちは口をきかないで (de ne pas prendre d'initiatives)、あとは彼にまかせる〔頼る〕 (me reposer) ように注意した」(121) し、ムルソオの方も裁判長の質問に「弁護士に教えられた〔の指示の〕とおりに (selon les instructions) に答えた。」(124) 「ときどき割りこみたくなった」ムルソオも「おだまりなさい」(139-140) と弁護士に一喝されて首を引っこめる。判決直前、弁護士の択った「戦術」からして「破棄の可能性」が「ない」と知れたときも、ムルソオはなんの抗するところもなく弁護士の「理論〔条理〕に承服〔服従〕した (me suis rendu à ses raisons)。」(150) このように、弁護士は命令を下したり禁止したり、「主導権」(initiatives) を取って「指示」を与え、「条理」を説き、ムルソオはこれに「服従」するというように、両者の間は先ずは、強力な〈父〉と「模範的な息子」(147) の関係なのである。

弁護士は予審判事が「指名」した「官選」(92) の弁護士である。そして法廷に姿を現わすと「新聞記者席へ行って、人々と握手した」が、「電鈴が法廷に響きわたった」ときになってやっとムルソオ「のところへき」(121) たのだった。つまり、弁護士もムルソオのそれである以前において、〈父〉の支配する法廷という「同じ世界に属する人々」の一員なのであり、ムルソオ一人が「余計者で、いささか場違いの所に入りこんだ人間〔闖入者〕 (intrus)」(120) なのである。「闖入者」は「同じ世界」から排除して「ゼロにし」(147) てしまわねばなるまい。実際、結果からしても経緯からしても、「防禦側」であるにも拘らず、ムルソオが検事と弁護士の「この二つの弁論

はそれほど違っていたらどうか」(139)と反問するように、弁護士は消極的  
にはあるが「裁く」者の側に与しているのである。

大体、審問が本格化する二回目の予審のとき弁護士は何故「来られなかつた」のだろうか。「予期せぬ支障のため」(95)と予審判事はぼかして説明している。だが、弁護士がムルソオとの最初の面会で、ムルソオ「にたいして少し嫌悪を感じ」、「気を悪くし」た上「いくらか怨んでいた」とするなら、「同情」をなくしてムルソオの事件を後回しにしたとしても不思議はないのである。結局、ムルソオは「弁護士の立会いを待つ権利」(94-95)を放棄し、その審問で「後悔」(101)を知らない「頑なな魂」(100)という固定観念を判事に抱かせてしまう。以降「事件は、いわば分類ずみ」(101)の観を呈するわけであるから、この弁護士欠席の審問が「[検察側の] 論告 (accusation) の絶好の材料」(93)を提供したのであって、故意にしる偶然にしる、弁護士は立会いを怠ることによって、この時点で早くも「弁護側」の敗北を自ら決定付けたと言っても過言ではないのである。

この早々に〈息子〉を見棄ててしまう「防禦」は名ばかりの〈慈父〉は、無能なく〈厳父〉でもあることを暴露する。弁護士の「作戦」と「万事うまくいって、[……] 数年の禁固か懲役ですむだろう」(150)という予想は見事に外れて、「首をはねられる」(151)という最悪の結果に終る。だが〈息子〉はやはり、この事態あるを疾うに見抜いていたのではなかったか。「僕には彼[弁護士]が検事より大分才能の点で劣るように見えた」(147)とムルソオは言っていたのである。

更に又この「若」すぎる〈厳父 = 慈父〉は、やはり一個の「戯画」に、道化した「操り人形」に、嗤うべき劣弱な〈父〉にすぎないことを、早くから〈息子〉に印象付けてもいたのである。初回の面会の際、ムルソオは弁護士の「奇妙な (bizarre) ネクタイ」(93)に注意を惹かれたのだった。法廷では、弁護士は「両手をあげ、さがった袖から、糊のきいたシャツの折り目を見せながら、叫んだ。[……] 傍聴席 [観客] (le public) は笑った。」(136) そして

端的に「弁護士は僕には滑稽(ridicule)に見えた」(147)と〈息子〉は言っているのである。

(8) 予審判事——初対面の判事の肖像をムルソオは「背は高く、長い灰色の口髭と、ほとんど白いゆたかな髪<sup>の</sup>持主<sup>だ</sup>だった。いかにも分別<sup>が</sup>あり<sup>そ</sup>うで、〔……〕結局、好感<sup>の</sup>持<sup>て</sup>る<sup>男</sup>だった」と描き出している。その容姿といい「分別」と「好感」を感じさせる風貌といい、正に〈敵父＝慈父〉の典型であると見える。〈息子〉のムルソオもまったく例外的に自分の方から「彼に手をさしだそうとさえした」(92)程であった。ところが、二回目の出会いで忽ち〈父〉はそうした完璧なイメージを自ら打ち砕いて〈息子〉の寄せる「好感」を一挙に失ってしまう。判事は「はっきりした論理」(97)を無視し、「落ちつかぬ様子」で「坐ったり、髪をかきみだしたり、机に肘をついたりして、奇妙な様子で僕のほうに少し身をかがめた。〔……〕両手を顔にあてて、少しうわずった声で〔……〕とつぜん、彼は立ち上って、大股で部屋の端のほうに歩いて行き、〔……〕そしてすっかり変った、慄えるような声で、叫んだ。〔……〕非常な早口で、熱狂的に、〔……〕彼は全身を机の上に傾けていた。彼は十字架をほとんど僕の頭上でふりまわした。僕は彼の理屈にまるでついて行けなかった。〔……〕彼が少し恐しくもあったから。同時に僕は彼の言動を滑稽だとも思った。〔……〕気でも触れたように叫んだ。」(98-100) こうして見ると判事の気分の変化の激しさがよく分り、殆どヒステリー状態であると言える。「熱狂」に駆られて「論理」も「理屈」(raisonnement)も見失い、最初の「分別<sup>が</sup>あり」(raisonnable) そうで「しごく丁寧な口調で」(95)話し掛ける〈敵父〉の装いはかなぐり捨てられ、その「気でも触れた」(déraisonnable)様子から何をされるか分らぬ「恐し」さを覚えさせる「暴力的な父」に「すっかり変っ」てしまっているのである。

この自らの〈父〉性を否定するが故に「恐」れられる〈父〉は、同時に又「滑稽」な〈父〉でもあるのだ。判事の「坐ったり」、「立上っ」たり、「大股で〔……〕歩い」たり、「十字架を〔……〕ふりまわした」りする、ぎくしゃ

くした大仰な身振りは、舞台上の「操り人形」のそれを想わせる。彼は自分の「前にきた犯罪人たち」を相手に「いつも」(100)、「後悔〔悔悛〕(regret)」(101)劇を演じてきたのである。しかしこうした判事の「恐し」い「戯画」としての本体は、その徴を夙に〈息子〉によって気取られてもいたのである。ムルソオは初対面の判事の「ときどき神経症的に口の端をひきつらせる癖」(92)に気付いていた。「神経症的」(nerveux)な「癖」(tics)は自動的なものであって、「恐し」く且つ「滑稽」な「自動人形」の印であったのだ。

判事は「キリスト教徒」(100)として〈父〉なる「神を信じている。」(98)彼は予審判事として「人間の裁き」の先鋒を承るが、それ以前に〈父〉なる「神の裁き」(165)の代理人なのである。彼は神の「許し」を得るためには「悔悟によって小児のようになり、魂が空虚になってすべてを受入れる用意がなければならない」(98)と、〈父〉なる神と、「人間」の〈父〉たる自分に全面的に服従して「お縋りする〔身を委ねる〕(te confier)」(100)〈息子〉たれと説くのである。ところが自分の目の前にしているのが、神を「信じない」(99)し「神様のたすけ」も「滑稽」な「人間」の父の「たすけ」(97)も撥ね付ける「反キリスト」(102)、反抗的な〈息子〉と知れると、脆くも一変して「君は僕の人生を無意味にしたいのか」(99)と泣き落としにかかる。これでは判事の方が駄々をこねて相手を我が-儘にしようとする「小児」であり、「それは僕に関係のないことだ」(99)とこれを一蹴するムルソオの方が「分別」を保つ〈父〉であって、役割転倒と言うべきである。そこで判事は逆襲に出て、今度は「キリスト」の権威を後楯にし、高飛車に「俺はお前の過ちにたいしてこの方のお許しを乞うのだ」と言う。馴々しく且つ見下した「お前呼ばわり (tutoyait)」(100)によって判事は強引に〈息子〉を捩じ伏せ、且つ一方的に事態をムルソオ「を抜きにして処理」(140)することによって〈父〉の面子を保とうとするのである。だが結局、「勝ちほこっ」たのは〈父〉ではなかった。〈息子〉の方は「涙をながす」こともなく、〈息子〉の「頑なな魂」を「幾分悲しそうに見つめていた」(100)のは惨敗を喫した

〈父〉たる判事であった。

このように〈厳父〉としての役割に失敗した判事は以降「もう神については語らず、あの最初の日の昂奮は決して二度と見せなかった。」彼は「うちとけた」物分りのよい家長の役柄を「誇張なく演」(101)じ、ムルソオの方も又そうした「意地悪」をしない物優しい〈父〉に「肩をたた」かれることに無上の「楽しみ」を覚える温順な〈息子〉を演じて、〈慈父〉と〈良い子〉の「和気」藹々の「家族」劇が演出される。だが同時に〈息子〉はそれを「滑稽 (ridicule)」(102) だと言う。何故なら、ムルソオが相変らず「反キリスト」即ち「父と御子とを否定する者」であることを、「御子を否定する者は父を持たず」<sup>82)</sup>であることを、彼も判事も承知の上での「演」技だからである。だが「否定 (non)」(100) された〈父〉は、偽りの〈慈父〉の仮面の下で、「論告の絶好の材料」となる予審調書を作成して、この「頑な」な「反キリスト」たる〈息子〉の裏を搔くであろう。

(9) 裁判長と陪審員——「判決」を統括して下す人とそれを左右する「答申」(150)を出す人々、いずれも「人間の裁き」を司る最高責任者達である。裁判長 (le président) は「赤い服を着」(122) ている。それは正しく「権威」の「赤」である。彼は開廷に当って「主要の論議がこれから始まるが、傍聴人 (le public) に静粛を保つように注意する必要はいまさらなかろうと言った。彼によると、彼がここにいるのは、事件を客観的に考察しようとする立場から、論議を公平に導くためであった。陪審員の下す判決は、正義の精神によってなされるであろうし、どんな場合にも、たとえ小さな事故でも起れば、彼は傍聴人 (la salle) すべてを退廷させるであろう」と述べる。即ち彼は自らが、「法廷」という〈父〉の世界を「導く」人、「支配者」(président) であり、「正義」と「公平」の化身であり、場合によっては廷丁や憲兵を以て「退廷」させる権限と権力を有する〈厳父〉であると宣しているのである。他方、ムルソオは自分に裁判長が「おだやかに」接するのを見てそこに「好意の匂い」(124) 即ち〈慈父〉の徴を読み取ろうとするのである。

こうした〈敵父＝慈父〉の装いにも拘らず、裁判長は判決を下す段になるとその本来の面貌を曝け出す。「奇妙な言いまわしで、僕〔ムルソオ〕がフランス国民の名において、広場で首をはねられるだろうと言った」(151)とき、裁判長は〈息子〉の「運命」(140)を掌中にする去勢する者としての「暴力的な父」以外の何者でもない、と見える。だが、何故「奇妙な」(bizarre)なのだろうか。この一語によって、「暴力的な父」の役柄も又裁判長には分を過ぎたものであることが示唆されているのではないか。

振り返って見れば、裁判長は法廷(salle [d'audience])という劇場(salle [de spectacle])の支配人(président)なのであり、「観客」(le public)を前にして「惨劇(drame)」(135)を裁く裁判劇の演出方を受け持つ一方、自身裁判長という役を演じる俳優でもあったのだ。そして更に、彼は「三句ごとに話をきって、《たしかにそうかね》と訊ね」(124)、「法規」(127)に則って「同じ儀式」を「くりかえ」(128)すというような機械的な所作によって、自動性の刻印を受けていることを示す。彼も又「奇妙」で滑稽な「自動人形」の一つにすぎなかったのである。ムルソオが最初に観察した裁判長の「中央の肘掛椅子に坐り、縁無し帽を前において、小さな禿頭はげあたまをハンカチでふく」(122)という仕種のもたらすどこか滑稽な印象はやはり誤りではなかったのである。

陪審員達は「お互いに区別している特色を言うことはできない」程相似た「一列の顔」と見え、ムルソオは「市電の座席の前に立っていて、坐っている名の知れぬ乗客たちがそろって新参者のおかしなところを見付けだそうとして、横目で睨んでいるという印象をあたえられた。」(119)だが、「おかしなところ」(le ridicule)は明らかに、玩具屋の店頭「一列」に並べられた大量生産の人形とも紛う者共に「横目」というような人間臭い眼差しが付与されているところに、陪審員達にある。そして、「陪審員の抽籤、裁判長の、弁護士、検事、陪審団への質問、(そのたびに陪審員たちの頭は全部同時に法廷へ向けられる)」(122)とか、「市電の座席は全部裁判長のほうをむいて



いた」(124)とか、「陪審員のひとりひとり〔……〕が、そろって麦藁の扇を手にしていた」(126)とか、あるいは「陪審員たちのさまざまな色の扇子が同じ方向にゆれていた」(146)というように、陪審員達の個性を持たない、玩具の兵隊のような機械的で画一的な身振りが一貫して強調されている。「市電の座席」と繰り返し茶化されているところに明らかに窺い知られるように、陪審員達こそ「滑稽な」(ridicule)「操り人形」、嗤うべき劣弱な父の見事な見本なのである。

(10) 刑務所付司祭——ムルソオに司祭は繰り返し「わが子よ」(166, 168)と呼び掛ける。そして、「なぜ」ムルソオ「が彼を《あなた》と呼んで《わが父》と言わないのかとたずねた。」(168) ムルソオは始め「彼の姿を見て、〔……〕ちょっと慄えた。彼はそれに気づいて、恐がってはいけないと言った。」「まったく友人としての訪問」(162)だと司祭は言い、「君〔わが友〕(mon ami)」(164)と呼び掛けもする。ムルソオの方も結局、「彼の態度はひどくおだやか(doux)に思われた」(162)と述べる。「恐」いけれども「優しい」(doux)〈厳父 = 慈父〉として司祭は登場しているわけだ。しかもこの〈父〉は「ひどく確信ありげな(certain)様子」(169)で、その「視線は慄えず」「声もまた慄えなかった。」(165) 予審判事とは大いに相違して「確かな」(certain)〈父〉の「模範」(147)を供しうると見える。だが、やはりそれも暫しの「遊戯〔演技〕(un jeu)」(165)にすぎないことが暴露されるのである。

司祭も又、「神を信じない」(163)と言う「我が子」を「信じることはできない」(167)と叫び、その「確信」(163)を疑い、死刑を目前に控えた者の「恐怖」に付け入って、「神様」の「助け」を乞うように、神の代理人である司祭「から助けられること」(164)を希むように勧めるのであり、ムルソオの「拒絶」(162)の壁が固いと見てとると、戦術を転換して「抱擁するのを許してくれるか」と情に訴えて出、それでも「いやです」(167)と撥ねつけられて「頑なな魂」に最早歯が立たぬと知れると、「私はあなたの身内です。ただあなたは心が盲いているからそれがわからないのです。私はあなたのた

めに「に代って」祈ります」(168)と言うのである。彼もやはり予審判事と同じ様に、最後には〈敵父 = 慈父〉の装いをかなぐり捨て、「暴力的な父」の本性を露にして、力づくで〈息子〉を神とその代理人としての司祭、即ち〈父〉の足下にひれ伏させ〈父〉の体面を保持しようとするのである。「盲いている」(aveugle)という高飛車な言葉遣いに、去勢の烙印を押し付けようとする去勢する者としての「暴力的な父」の証を読み取るのもよいであろう。だが更に、「あなたに代って祈ります」という言葉に、〈息子〉の口を塞ぎ、その「私」(146)を封じ籠めるといふ、拙論に謂う去勢に自ら走る本来の〈父〉性に背く〈父〉の姿を見て取る方がより本質を突いた見方ではなからうか。

〈息子〉はこれに対して、まことに正当にも、司祭「は僕の父ではない、他人たちのひとりだ」(168)と叫ぶ。つまり、自分は「父と御子とを」信ずる「わたしたちに属さない者」<sup>83)</sup>、「反キリスト」であるというわけだ。そして、司祭の「確信はどれをとっても女の髪ひと筋の値打もない」と偽の〈父〉の「値打」を看破し、「すべてに確信を持っている」のは「いつでも正しい」のは、「正当化される〔義とされる〕(justifié)」のは〈息子〉の自分の方だと断言する。それどころか、似而非〈父〉を「死人」(169)に譬え、「彼もまた死刑を言い渡されよう。彼が殺人の罪を問われ、母親の葬式で泣かなかったために、死刑を執行されたとしても、それが何だろう？」(170)と、恰も死刑台に上るのは〈父〉であるかのように喚くとき、〈息子〉の方が空想裡に去勢する者の位置に立っているものであり、「暴力的な父」を演じようとした司祭は却って被去勢者として「両目に一杯涙をためて〔……〕姿を消した」(170)のであった。そして〈息子〉の前から最後の〈父〉が「姿を消した」今、「ある暗い息吹き」がムルソオ「の方に立登って」きて、それが物皆「すべて同等の価値にし」、「現実性のない」(169)ものにし、すべての「生活」と「選択」(170)とを無効にし、「人生」を「馬鹿馬鹿しい〔不条理的な〕(absurde)」ものにしてしまうのである。「他人どもの死が、母の愛が、

僕にとって何だろう」(169)と意外な文脈で現われる「母の愛」の登場は、息子のムルソオの母への愛が訊われこそすれ、一度たりと問われることのない「母の愛」への唐突な言及は、「僕とともに数百万の特権者」の上に席捲するこの「たったひとつの運命」(170)の正体がいったい何であるかよく示していよう。それは死の母であり、〈悪い母〉なのである。〈父〉性を排除し、〈父〉によって導き入れられる「兄弟」(170)達の世界が「僕と永遠に関係を断たれた世界」となった以上、〈息子〉が死刑台で相まみえるのは「憂愁にみちた」(171)〈悪い母〉以外にありえようか。

(この項つづく)

〔注〕

- 66) フロイト『性欲論三篇』, p.78. / 67) フロイト『精神分析学入門』, p.404. / 68) E. ジェイコブソン『自己と対象世界』, 伊藤光訳, 岩崎学術出版社, p.55. / 69) フロイト『ある幼児期神経症の病歴より』, 小此木啓吾訳, フロイト著作集第9巻収録, 人文書院, p.404. / 70) Costes: *op. cit.*, p.65. / 71) *Ibid.*, p.30. / 72) フロイト『トーテムとタブー』, p.265. / 73) フロイト『ある幼児期神経症の病歴より』, p.404. / 74) フロイト『マゾヒズムの経済的問題』, 青木宏之訳, フロイト著作集第6巻収録, p.308. / 75) 例えばガサンはこの「話」の解釈に当たって、ムルソオの父は死刑を見に行くことによって「処刑者の意図的な共犯者」になったのであり、且つ又「身体具合が悪くなった」ということは父自身が「ギロチンによって去勢された」ことを含意しているとし、他方で作者カミュの父が戦場で「頭蓋が割れる」という致命傷を受けたという伝記的事実を引合いに出すことによって、作者カミュ自身の脳裏において、そしてカミュの作品の中で、以降〈父〉は「断首と死の、そして又去勢の象徴」となったと述べている(J. Gassin: *op. cit.*, p.225.)。 / 76) フロイト『ある幼児期神経症の病歴』, p.404. / 77) Costes: *op. cit.*, p.30. / 78) Pierre Guiraud: *Dictionnaire érotique*, 1978, Payot, p.470. 又、ガサンによれば、「スパニエル犬」の「湿疹〔赤色〕(le rouge)の象徴的含意は「性的で女性的」なものである(J. Gassin: *op. cit.*, p.219.)。 / 79) J. Gassin: *op. cit.*, p.174. / 80) *Ibid.*, pp.177-179. / 81) P. Guiraud: *op. cit.*, p.295. / 82) 『ヨハネの第一の手紙』, 2-22, 23, 『聖書』, 日本聖書協会, p.377. / 83) 同書, 2-19, p.377.